

東かがわの手袋産業

香川県東部の東かがわ市は、日本の手袋産業の中心地です。ここに日本の主要メーカーのほとんどが集まっており、総合すると日本で作られる手袋の約 90 パーセントを生産しています。この地における手袋産業の歴史は、1888 年にまで遡ります。この地出身の元僧侶、両児舜礼（1853-1891 年）が、新婚の妻と共に大阪に移り住み、そこで彼女を養うために手袋製造業を始めたのが始まりとされています。舜礼が 39 才で早逝した後、従兄弟の棚次辰吉（1874-1958 年）がこの事業を引き継ぎました。

東かがわ周辺の地域は、伝統的に製塩業で生計を立てていましたが、1800 年代後半には衰退の一途をたどっていました。人々は苦境に陥り、地元の村長は大阪を中心に事業を行っていた棚次に助けを求めることにしました。この手袋職人は、地元で事業を移転することに同意し、1899 年、両児舜礼の未亡人と共に現在の東かがわ市のある場所に新工場を設立しました。彼らの事業は成功を収め、棚次は、西洋の技術や先進的な機械を導入することで積極的に事業を拡大し、その過程で 24 件もの世界特許を取得しました。

第一次世界大戦は、日本の手袋産業の起爆剤となりました。当時の手袋産業において二大生産国であったイギリスとドイツが戦争に奔走するなか、日本の工場には世界各国から軍用手袋の注文が殺到していました。東かがわ市の手袋産業は栄え、後の世界恐慌や第二次世界大戦などの苦難にも耐えることができました。1950 年代以降、朝鮮戦争や戦後の高度経済成長に後押しされ、日本は世界最大の手袋生産国となりました。その栄光の日々は遥か昔のことですが、東かがわ市の手袋産業は今でも活気に満ちています。その商品は、一般的なミトンから婚礼用手袋、野球やゴルフ、スキーなどのスポーツ用手袋まで幅広く、最近ではバッグや革小物などの関連分野に進出している生産者もいます。

2008 年に開館した「東かがわグローブミュージアム」では、訪問客に手袋の歴史や職人の技を紹介しています。ここでは、アンティークの工具や機器、世界中の手袋、素材などが展示されているほか、完璧な手袋を作るための職人技も紹介されています。展示品の鑑賞後は、隣接するアウトレットショップで、この地域で作られた様々な手袋を試着することができます。